

Humanistic Business

Dylan Scudder

多くの人は、仕事を、生計を立てる手段としてだけでなく、生活の質を向上させる手段として見ている。今、赤道の両側で、社会問題や環境問題をビジネスへ統合することにより、生活の質を向上させる方法を探究し始める人が増えている。しかし、利潤だけでなくそれ以上のものを求めようとした時、そのことが会社の文化と矛盾するという現実直面する。企業は、限られた条件の中で、法的にも株主の利益よりも公衆の利益を優先できるような体制にはなっていないという事実気づく。しかし、この相反する2つの利益を両立させることこそ、生活の質を向上させることになるのではないか。¹ 人類の歴史の中で、長い間、人々は仕事の種類を選ぶ選択肢が与えられていなかった。ほとんどの人が親の仕事を継いで農業や羊飼いや職人になっていった。² しかし、それは15世紀のヨーロッパで変化し始め、若者が農場を離れて街へ出始める。³ 人々は仕事を選ぶことができるようになり、それ以降はその傾向はますます強まってきた。仕事へのアプローチの仕方は、おおまかに述べると、3つあるといえる。1つ目は、収入を得るための職業と見るアプローチ、2つ目は、収入だけでなく社会的地位を得るためのキャリアと見るアプローチ、3つ目は、仕事を、世界の貧困や地球温暖化の防止など、より偉大な目的につなげることによって、より深い達成感を得る天職・使命と見るアプローチである。はたして人々は、現在の仕事やキャリアを天職ととらえることによって、また、企業に存在する矛盾を克服する挑戦によって、生活の質を向上させることができるのだろうか？

創造的な対応（クリエイティブな対応）

イギリスの著名な歴史家アーノルド・トインビー氏によると、文明の存続を脅かす危機的状況において、創造的な対応を生み、発展・繁栄させることこそが文明の能力であるという。たとえば、紀元前4世紀のエジプトの降水量の地域的変化が1つの例である。エジプトのある地域で雨量が減り、狩猟や採集などの伝統的な生活様式が存続できなくなった時のことだ。それに順応できない人々は絶滅していった。また、他の場所へ移り、狩猟や採集を続ける人々もいた。⁴ その中であって、創造的な少数派の人々はその場所にとどまり、ナイル川の灌漑を編み出したのだ。それによって、農業で生活を立てるようになり、エジプト文明の発祥につながった。今日、アメ

リカ環境プログラムは、地球の温度が確実に上昇しているために、毎秒ごとにフットボール競技場分の広さの森林が破壊されていると報告している。このことに気づき、多くの企業や個人が、環境や人間に害を及ぼさないビジネスのやり方を考案しようと、新しい試みを始めている。このような創造性は、製品がどこで生産されているのか、その製品が長期的に見て社会にどのような影響を与えるのかを考え、未来の世代や環境といういわゆる沈黙の第三者の声を聞く能力に表れる。このような洞察に基づいた新たな試みに成功した人々こそ、今日における創造的な少数派と呼ぶにふさわしいと言えるだろう。

早期の展望

利益活動と公衆が受ける利益の間にある倫理的矛盾は、それぞれの文化や宗教において違った見方をしている。たとえば、イスラムの文化は、他の多くの文化と同じく、財産を認めない。蓄財は罰せられ、財産の一部を差し出したり（ザカ）、雇用を増やすなどの再投資を勧められる。⁵ 東洋においては、孔子が、利益追求のふるまいは社会の融和を乱すものであると警告している一方で、仏教の考え方では、他者に害を与えない仕事には従事することを勧めている。現代の一般的な企業のモデルは西ヨーロッパから生まれたものだ。ソクラテスの弟子であるプラトンとアリストテレスは、いかにして高潔な人生を生きるかという今も続く倫理的論争の枠組みを築いた。ローマ帝国の没落後、ドミニコ修道会のセント・トーマス・アクィナスは、アリストテレスに傾倒し、死の前（生きている間）に幸福に達することができる可能性について書き始めた。⁶ この論文には、利益追求、倫理、幸福といったことが含まれていたが、それらが相互に強化しあうためにはどうすればよいかについては論争の主題にはなっていなかった。

ルネサンスの時代、学者は教会にかかわって道徳的着想の源とみなされるようになった。18世紀の啓蒙思想の中で登場したアダム・スミスは、主著である「国富論 (Wealth of Nations)」の中で、個々人が利己的な利益を追求したとしても、商業的社会は繁栄するのかを研究した。⁷ 当時のスローガンは、「最大数の人々の最大の幸福」を達成することであった。

物質的束縛

もし我々の仕事の唯一の目的が収入と社会的地位を得ることであったなら、人生はオフィスでひたすら働くうちに通りすぎていくものになってしまう。貧困の中で生きている人々は、収入が増えれば生活が改善されることは言うまでもない。しかし実は、お金が幸福に影響する度合は驚くほど小さいのだ。人は基本的欲求を満たされると、消費が増えたとしても、その満足度は横ばいとなり、その後は減り続けていく、と調査は示している。人々は、心理学者フィリップ・ブリックマンとドナルド・キャンベルが造った言葉「快樂の繰り返し」にはまってしまう。⁸ 収入の増加と共に期待度も上がり、人々が切望する欲求の充足は常に手に入るものを超えているというのだ。我々の日々の仕事を天職にしていく方向に進もうとした時、その根拠はたくさんあり、

それら全てが関連している。たとえば、世界の人口の半分以上が1日2ドルに満たない生活費で暮らしている。人々から基本的に必要なものを奪うことは、紛争の可能性が増加することになり、大規模な暴力へとエスカレートする場合もある。にもかかわらず、今日のマーケットの中で一部のエリートが繁栄する一方で、国際経済のシステムは貧しい国が市場にアクセスするのを妨げる構造になっている。

現状打開

世界のどこにしようとも、人々は、利潤の追求のみでは生活の質は向上しないとわかった上で、またいずれはわかる状況の中で、ビジネスに従事している。自分自身の全ての潜在能力を開花させることから生まれるより深い達成感を得ることは、生涯かけて努力することだ。公衆の利益を、財政的に維持可能なビジネスに統合させる創造性がビジネスに加わった時、その目標に近づくことができる。今の仕事を天職にしていくために、(人々や環境に) 害を及ぼさない努力をしたり、単に紙の両面を使うことから始めてもよい。また、民間団体と提携したり、新たな社会的な企業を立ち上げる場合もあるだろう。紀元前の創造的な少数派のように、我々も貧困からくる暴力、環境破壊、気候変動といった生命を脅かす事態に直面している。今、すべての階層の先駆者たちが一歩前に進もうとしている。多くのビジネススキルをもつ人たちが、株主の利益とより多くの一般の人々の利益の間に存在する相反する関係性を克服するために、創造的な方法を開発しようとしている。創造的な対応を生み出す努力は、我々一人一人の中に眠るダビンチやガリレオを呼び覚ます個人のルネサンスの始まりなのかもしれない。我々が仕事場で費やす長い時間と、消費者の決定が及ぼす大きな影響を考えると、ビジネスを「最大数の人々の最大の幸福」のために生かすことが、我々自身と社会全体の生活の質を向上させる有望な手段なのではないか。

注

- 1 Freeman, R. Edward. *Strategic Management: A Stakeholder Approach*. Boston: Pitman, 1984.
- 2 Bstan-'dzin-rgya-mtsho and Howard C. Cutler. *The Art of Happiness at Work*. New York: Riverhead, 2003.
- 3 *Ibid.*
- 4 Toynbee, Arnold, and D. C. Somervell. *A Study of History*. New York: Oxford UP, 1947.
- 5 Ahmad, Abu Umar Faruq. *Developments in Islamic Banking Practice: The Experience of Bangladesh*. Universal Publishers, Boca Raton, Florida, 2010.
- 6 McMahon, Darrin M. *Happiness: A History*. New York: Atlantic Monthly, 2005.
- 7 Smith, Adam, Edwin Cannan, and Max Lerner. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. New York: Modern Library, 1937.
- 8 Brickman; Campbell (1971). *Hedonic relativism and planning the good society*. New York: Academic Press. pp. 287–302. in M. H. Apley, ed., *Adaptation Level Theory: A Symposium*, New York: Academic Press.